福応会　令和５年度　文化講演会　講演要旨

19 世紀末、エリック・サティの奇妙な音楽　～常識を覆す発想を楽しむ～

福井大学教育学部長　澁谷政子

概要

西洋音楽は時代ごとに大きく変遷し、音楽の構成方法と美学が時代や社会背景に影響を受けて変わってきた。エリック・サティは独自の音楽を創作し、従来の音楽の価値観に異議を唱える異端児的存在であった。彼の音楽の特徴は、シンプルさ、皮肉・ユーモア、音楽の境界線探求であった。サティの音楽は当時は理解されなかったが、20 世紀にその現代性が再評価され、現在も彼の挑戦した枠組みや常識が受け継がれている。音楽教育において、いろいろな音楽の背景には、さまざまな価値基準や当時の常識があり、それを理解することが重要である。音楽を学ぶことで、常識を覆し、自分の感性や思考を広げることができ、新しい価値の創造や感性を拡げる可能性がある。

本文

本日は、クラシック音楽が変化していく過程におけるエリック・サティの音楽の特徴やその意義、そして音楽を学ぶことの面白さなどについてお話しさせていただきます。

1.　サティ以前の音楽の流れ

西洋の音楽の流れは、大きく三つに分かれます。8 世紀から 16 世紀にかけての「中世・ルネサンスの音楽」、17 世紀から 19 世紀にかけての「バロック・古典派・ロマン派」、そして 20 世紀以降の音楽です。そのうち、17 世紀から 19 世紀の音楽が一般に「クラシック」と呼ばれています。

中世・ネルサンスの音楽は、キリスト教の教えにどう合わせるかということが非常に大事でした。バロック音楽では反復とコントラストによる統一が特徴です。古典派、特にベートーヴェンは主題の展開による成長や発展のストーリーに合わせることが特徴です。ロマン派の音楽では、作曲者の個の表現の追求が行われ、感情やドラマの表出が出てきて、完結した小宇宙としての「作品」が登場してきます。20 世紀以降の音楽では、音楽作法と音楽概念の刷新が図られました。

このように、音楽は時代によってその枠組みが大きく変わってきました。音楽の枠組みとは、構成方法（音階、和音、拍子、リズム、パート構成、形式など）と、美学（音楽で何を目指すか、何を表現するか）などのことです。各時代ごとに、音楽的に良い、という基準がありました。音楽とは何か、という考え方も時代によって変わってきました。

例えば、中世・ルネサンスの音楽では、個人の感情などは問題ではなく、より崇高な神の教えがテーマでした。また 19 世紀後半、後期ロマン派の音楽は、「個」の表現、オリジナリティの追求が求められまし

た。その時代背景としては、フランス革命に象徴されるように、王族や貴族ではなく、庶民一人一人の「個」が重視された社会の存在があります。音楽は個の秘められた内面や感情、ドラマを表現するものとして、「感情」や「想像」が非現実の美や真理への扉を開きました。感情の美学が花開いた時代でした。異なるものの対立・葛藤・闘いから、充実・成長・統合へ向かう時代、それは「苦悩をへて勝利へ」とも表現されました。

2. 異端児としてのサティ

19 世紀末には表現内容や構成法のオリジナリティの限界に到達し、いわゆる出尽くした時代になります。その時代に登場したのがエリック・サティ（1866～1925）でした。彼と同時代の芸術家としては、ドビッシー、ラヴェルなどがいます。彼が生きた時代は、パリ万博の第 1 回から第 4 回が開催されており、世界からさまざまな文物がパリに集まってきた時代でした。また、普仏戦争やパリコミューンが起こった激動の時代でもありました。科学技術の分野では、電話機や自動車や X 線が発明された時代でもありました。

エリック・サティは、教会のパイプオルガンに興味を持ったことから音楽の道に進みました。サティは、19 歳でパリ音楽院に入学しましたが、2 年後に退学しました。彼は、伝統的な音楽教育に反発し、独自の音楽を創作するようになりました。音楽の主流からは外れたのですが、新たな芸術を目指す若い音楽家・芸術家たちから一部熱狂的な支持を得るようになりました。彼は新しい芸術運動にも積極的に関わり、バレエや演劇、映画などに幅広く活動しました。しかし当時の音楽界からはほとんど理解されず、異端児扱いされました。彼の業績が評価されたのは、第二次世界大戦後になってからです。

サティが生きた時代の音楽界からすると、彼の音楽はどこにもカテゴリー化できない不思議な存在だったのだと思われます。サティの音楽には、三つの大きな特徴があります。それは、「シンプル」「皮肉、ユーモア」そして「音楽の境界線」です。

3. サティの音楽の三つの特徴

まず「シンプル」についてです。サティは後期ロマン主義の音楽とその価値観を否定しています。その価値観とは、濃密な心理描写、量感のある音響、複雑な和音・フレーズ感覚・長大な形式・構造などで、典型的なものといえば、ワーグナーの「ワルキューレの騎行」です。

これに対してサティは、中世の教会施法を用いたり、古代文明や中世のイメージにより、極めてシンプルで短い曲を作りました。その典型は「三つのジムノペディ」だと思います。ジムノペディとは古代ギリシャにおいて戦でなくなった戦士を悼む踊りのことです。メロディは別の原曲に基づいているわけではなく、純然たる彼の創作です。非常に簡潔な曲です。何かを表現していそうで、しかしぼんやりとした雰囲気にとどまっている、不思議な音楽をサティは作りました。軽やかでおしゃれなサティというイメージも持たれるかもしれません。

次に「皮肉、ユーモア」についてです。サティは、奇妙なタイトルの曲でも知られています。例えば、「犬のための本当にぶよぶよとした前奏曲」とか「冷たい小品」、「五つのしかめっ面」というような曲を

作っています。奇妙なタイトルに加えて、曲がタイトルとピッタリというわけでもありません。これは、19世紀の音楽に対する皮肉であり、「標題音楽」のパロディでもありました。

「標題音楽」とは、音楽は感情や情景やドラマを表現する、という考え方を重視した19世紀の音楽です。これに対してサティは、どうということのない状況、ナンセンスなタイトルをつけることで「標題音楽」を皮肉ったわけです。例えば、「ひからびた胎児」とか「ナマコの幼生」「甲殻類の幼生」などの曲が有名なものだといえます。これらの曲には楽譜に短いナレーションのような文章がつけられているのですが、その文章は大変奇妙でナンセンスなのです。

このようなサティの活動に対して、ドビッシーから「君はもう少し形式のしっかりした曲を作った方がいいよ」という忠告を受けたことがありました。その忠告を受けて作った曲が「梨の形をした三つの小品」です。この曲は、ソナタ形式のパロディになっており、「梨」というフランス語にも相手をバカにする意味も含められており、この曲も従来の形式や構成を皮肉ったものだと思います。

4. 20世紀の音楽におけるサティの業績

ここまでの内容だと、単なる異端児という印象がありますが、それ以外にサティの音楽には20世紀の音楽における重要な意義があると思います。それが「音楽の境界線の探索」についてです。サティは、当時の音楽の規範とは異なるものを求めていきました。そして旋律や和音、形式などの音楽の具体的な作り方だけでなく、どこまでが音楽かという境界を問う活動を展開しました。理論的に構築された音楽活動ではありませんでしたが、いろいろな思いつきで既存の音楽から少し出てみようという活動を行いました。例えば、サティは他ジャンルとのコラボを行いました。ファッション誌の編集者による企画では、おしゃれなイラストに短い音楽をつけて出版する際の作曲を手掛けました。

またサティは普通の楽器に加えて、日常の音を音楽に取り入れました。当時有名だったロシア・バレエ団から依頼され「パラード」というバレエの楽曲を作りました。この作品の美術装置はピカソが担当し、台本はコクトーが書きました。その中には、ガラス瓶の笛、くじ引きのガラガラの機械、水のピチャピチャいう音などが指示されており、たとえば「アメリカの少女」という曲の中にはタイプライターを打つ音などが取り入れられています。

19世紀のロマン派音楽では、芸術音楽では楽音以外のものを徹底的に排除する方向に進んでいました。例えば音楽ホールでは日常音を遮断し、静かに音に聞き入ることを求めました。それは作曲家の心の内面のひだを全て受け止めるためには、雑音は排除されなければならなかったからです。それに対してサティは、果たして「楽譜」の音と「日常音・雑音」とを区別すべきかどうかということを問いかけたのだと思います。

さらにサティは、一生懸命に聞かれなくてもよい音楽を作ろうということにも取り組みました。例えば「ヴェクサシオン」という曲では、楽譜は短く、ぼんやりとしたフレーズなのですが、それを延々と繰り返す曲となっています。楽譜の冒頭には、「840回繰り返すためには心の準備が必要です。大いなる沈黙の中で不動の姿勢を持って。」という皮肉めいた注釈が書かれています。

サティの晩年の曲には、永遠の反復パターンが出てくるという特徴があります。彼はこれを「家具の音楽」と呼びました。サティはこの「家具の音楽」について次のように語っています。

「周囲の音の一部となって溶け込む音楽。メロディアスで、ナイフやフォークの音を隠すけれども、完全に消しはしない、押し付けがましくもない、そんな音楽。この音楽は時折訪れる気まずい沈黙を埋めることもできる。何よりも、強引に割り込んでくる街の騒音を和らげることができる。」

この「家具の音楽」は、コンサートホールでの集中した聴き方とは別の音楽のあり方を想定していると思います。集中的聴取に対する周辺的聴取ということです。従来の音楽においては、作曲家の心の表現がずっしりと盛り込まれ、それを聞き手が受け取らなければならないという枠組みがありましたが、サティはその枠組みの外を探索したのだと思われます。サティは「芸術家は聴衆の時間をみだりに占有する権利など持っていない。」と語っています。存在を主張しないけれど、しかしそこにあって生活の役に立ち、その場の雰囲気を作り出すような音楽をサティは作り出したのです。

しかしサティの「道具の音楽」は当時の人々に受け入れられませんでした。なぜ失敗してしまったのでしょうか。それは、まだ当時は BGM というものが普及していなかったことや、当時の音楽は生演奏が主であり、周辺的聴取には合わなかったためだと思われます。

5. サティの現代性の再発見

奇妙な音楽を作り続けたサティですが、最初は単なる反骨精神だったかもしれません。しかし最終的には 19 世紀的な「芸術作品」としての音楽の外に足を踏み出したことに先駆的な意義があります。当時はほとんど理解されませんでしたが、20 世紀になってその現代性が再発見されました。そして彼がチャレンジした当時の枠組みは現在も受け継がれています。

音楽は自由なものだと思われている方も多いかもしれませんが、実は音楽とはその時代の社会背景に大きく影響を受けるもので、完全に自由な音楽というものはありません。それぞれの時代に音楽をめぐる常識というものがあり、それを覆したのがサティだったと言えると思います。

サティの覆した音楽の常識をまとめると以下のようになります。
・短い単純な曲よりも複雑で長い曲の方が良い、という常識を覆した
・音楽は感情やドラマティックな情景を表現するもの、という常識を覆した
・音楽は個性の表現である、という常識を覆した
・音楽は、楽器の美しい音で構成されるもので、雑音や日常親とは区別されるもの、という常識を覆した
・曲を集中して聴き、作曲者が込めた意図に近づかなければならない、という常識を覆した

音楽は、その時代・文化・ジャンルなどにより、さまざまな枠組みや常識を前提としている。その音楽の価値基準・前提を理解することで感性が広がります。価値基準や前提がわからないから、その音楽がわからないということになります。日本の琴や尺八の音楽は、ドラマを求めるものではありません。それは心を掻き立てるものではなく、心を鏡のように整える音楽だと考えるべきだと思います。ヨーロッパ古典の大作は、なぜこのような長大なのかは、その背景を知ると理解することができます。音楽とは音だけ聴いてわかるものではないのです。

6.　音楽を学ぶことの楽しさ

音楽教育では、クラシック音楽をリスペクトしつつ、当時の思想・時代背景の中で成立したものであることを認識する必要があるのではないでしょうか。いろいろな音楽を通して、無意識の「常識」とは違う感覚や判断基準に気付き、そこで疑問を持ち、学び、そして違いを受け入れていくことが大切なのではないでしょうか。それが自分の感性や思考を広げることにつながっていくと思います。

自分の中の「あたりまえ」を疑ったり崩したりすることは簡単ではありません。しかし音楽であれば「あたりまえ」の常識をずらしてみることができます。音楽はイマジネーションの世界なので、感性や考え方をずらしてみることがしやすいのです。いろいろな音楽を学ぶことから、新しい価値の創造のタネが生まれる可能性があると思います。さまざまな音楽を学ぶことで、さまざまな価値基準や判断があるという全体像がわかること、それが音楽を学ぶことの楽しさではないでしょうか。